

2020年10月25日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「この主と共に」 マタイ 11章 25～30節

主任牧師 加藤 誠

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛(くびき)を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」(マタイによる福音書 11章 28～29節)。

68年間、大切にに使わせていただいた礼拝堂が取り壊され、更地になった。明日は起工式を迎えようとしている。68年前、焼け野原だったこの土地の瓦礫を取り除き、手作業で整地した大井教会の信仰の先輩たちの姿を思いながら、その一人ひとりが「大切にされたもの」を私たちもまた「大切にしていく」責任の重さを示されている。礼拝堂の上屋が取り壊されて、土台の解体が始まってみると、土の表面に見えていた部分よりもずっと大きな塊の土台が土の下に据えられて、礼拝堂を支えていたことを示される。ふだん人の目に見えていない土台が、建築にとってどれだけ大切か。それと同じように、私たちの場合は何を土台に据えているだろうか。外見(そとみ)をいくら整えて、格好よく見せられたとしても、「よくやっているね」「がんばっているね」という言葉をもらえたとしても、人の目には見えていない部分をどれだけ大切にできているか。その「心の土台」がいい加減だと、ちょっとしたことで建物全体があっという間に傾いていってしまう。「教会の土台はイエス・キリスト」と告白するわたしは、本気でその「土台」を大切にできているだろうか。自分の暮らしの中で、第一のものを第一にできているだろうか。68年前、手作業で汗まみれ土まみれになりながら礼拝堂の整地をされた信仰の先輩たちが「大切にされたもの」を受け継ぐ責任を、このとき心に刻みたいと思う。

さて、今朝もその「土台」である主イエスの福音に聴いていきたい。マタイ 11章には「イエスという男」に戸惑うバプテスマのヨハネの言葉から始まっている。ヨハネは、イエスが自分よりも偉大な働きをされる方であり、自分はこの方の履物を脱がせる資格もないと感じていたが、だんだんと主イエスの言動に戸惑いを覚えるようになる。旧約の戒めを次々と破り、罪人と呼ばれる人たちとも楽しそうに食卓を囲むイエス。「いったいあなたはどなたですか？ほんとうに待つべき救い主(メシア)なのですか？」と弟子を主イエスのもとに尋ねに行かせたのだった。

ヨハネの教えは「悔い改めにふさわしい実を結べ」と旧約聖書の戒めの一つひとつの実行を迫るものだった。それに対して主イエスは、律法では小さく評価される人を愛し、大切にされる「神の愛のまなざし」を宣べ伝えた。その人が何をしたか、何ができて、何を残せたかではない。神の愛をありがたく感謝して受ける。To Doではなく、To Be 神を愛し、神を感謝する心を大切にされた。

とてもまじめに旧約聖書の教えを守っている金持ちの男が主イエスのところに来たエピソードが福音書に記されている。「わたしは律法の教えを小さい時からす

べて守っています」と胸を張る男に、主イエスは言った。「そんなに自信があるのなら、全財産を売って、貧しい人に施したらどうだ？神を愛し、隣人を愛することを本気で生きてみろ！」と。けれど、その男は顔を曇らせて立ち去らざるをえなかった。本気で神を愛し、本気で隣人を愛するなどできない、実に貧しい愛しか持ち合わせていない己の姿を突きつけられたからだ。けれども、「愛に貧しい己の姿」に向かい合うことこそ、主イエスにこの男に求めたものだった。To Do 「わたしは〇〇を実行しています！」を誇るのではなく、To Be 「神さま、あなたの深い愛をほんとうにもったいなくいただきます。その愛に応じて、私にできることをさせてください」と、主イエスの伴いをいただいて、一緒に歩いていく道にこそ、主イエスの招きがあるからだ。

To Do を求めることなく、To Be を大切にされる主イエスのもとには、疲れた者も、重荷を負う者も招かれているし、「取り返しのつかない失敗をしてしまった」「わたしは何もできていない」と下を向いている者も、誰でも来ていい。主イエスのもとで「休みたい」と思う者は、誰でも遠慮なく来ていいのだ。その一人ひとりに主イエスは「わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい」と言われる。「軛」とは、家畜の牛が土を耕す時に、その両肩にかける木製の農具のこと。当時は二頭の牛が「軛」によって並んでつながれたという。つまり、私たち一人ひとりがそれぞれ「あなたの人生を耕しなさい」と背負わされている重荷があるときに、その重荷は一人で孤独に背負うものではなく、主イエスが一緒に背負ってくださっているという意味だろう。そして「わたしに学びなさい」とは、「わたし一人ではとてもこの重荷を背負いきれない」と思う時でも、主イエスから愛を分けていただき、優しさや勇気をわけていただき、主イエスに学びながらなら、私たちはその重荷を背負う力を与えられていくという意味だろう。主イエスはわたしがどんなに非力でも、決して見捨てることはなさないからだ。

この主イエスと共に軛を負う時に与えられる「安らぎ」とはどのようなものだろう。ルカ福音書 12 章に、大収穫の実りを手にして「これで俺の人生は安泰だ。飲んで食べて、何でも自由にできる！」と喜んでいた男が、「愚かな者よ、今夜にでもお前の命は取り去られる」と、神から叱責されるたとえ話がある。私たちはこの男を笑えない。この男が感じた「安らぎ」をどこか求めているわたしがいるからだ。しかし、そのような私たちに主イエスはこう呼びかけられる。「朽ちる食べ物ものではなく、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である」(ヨハネ 6:27) と。主イエスが与えてくださるのは永遠の命に至る「安らぎ」なのだ。そして、その「安らぎ」は、わたしが自分の行きたいところに向かうのではなく、「主イエスと共に、主イエスが願われている方向に向かって歩もう」とする時に与えられていく「安らぎ」である。この主と共に歩む時に与えられる「安らぎ」を一人ひとりが体験し、紹介していく教会でありたいと思う。